

雨よけ施設を利用した早生ウンシュウの樹上越冬完熟栽培体系の確立（第1報）

後期重点摘果が果実品質，収量ならびに翌年の着花に及ぼす影響

小野 壮一郎、豊嶋 貴司、吉田 純也、阿部 政人、山下 泰生、森末 文徳
香川県農業試験場研究報告 第65号（2015年3月）31-37

早生ウンシュウの雨よけ施設を利用した樹上越冬完熟栽培における後期重点摘果が果実品質ならびに翌年の着花に及ぼす影響を検討した。

1. 雨よけ施設内に植栽した早生ウンシュウ（系統名：「宮川早生」，「興津早生」，「小原紅早生」）に対して葉果比40となるよう後期重点摘果を行い，果実肥大，果実品質，収量および階級別果数割合を調査した。9月20日時点の果実横径は，収穫時の果実横径と相関が高く，9月下旬以降に摘果を行う際の目安になると考えられた。いずれの系統も後期重点摘果は，無摘果に比べ収量が半量程度となったものの，収穫果平均重が重く，2S・3Sの小玉果の割合が減少した。収穫時の果実品質は，糖度計示度が1以上高まったが，浮皮程度が高くなった。
2. 雨よけ施設内に植栽した早生ウンシュウ（系統名：「宮川早生」）に対して，葉果比40及び30に設定した後期重点摘果を行い，葉果比の違いが，当年の果実品質および翌年の着花に及ぼす影響を調査した。収穫時の果実品質は，後期重点摘果を行うことにより，対照（無摘果）より糖度計示度が高くなった。また，葉果比40の方が30よりも糖度計示度が高くなる傾向であった。浮皮程度は葉果比30が明らかに高くなった。収量には大きな差はみられなかった。処理翌年の着花は，後期重点摘果を行うことにより5段階評価で2～3の中程度となったが，無摘果では5段階評価で1の極少となり着花が減少した。また，葉果比40の方が30に比べ着花は多かった。
3. 以上のことから，雨よけ施設を利用した早生ウンシュウの樹上越冬完熟栽培において，高品質果実を連年安定生産するためには，葉果比40程度の後期重点摘果が有効であり，9月20日の時点で摘果すべき果実サイズは，収穫時にL級果以上となる55mm以上と，3S級果以下となる42mm未満であると考えられた。

キーワード：早生ウンシュウ，雨よけ施設，樹上越冬完熟栽培，連年着花，後期重点摘果